

附編 2

富山県内の縄文時代竪穴住居について～前期から中期にかけて～

堀沢 祐一

1. はじめに

北押川C遺跡から縄文時代前期後葉の竪穴住居跡が1棟検出された。富山県内では縄文時代の前期遺跡の発掘調査は少ない。竪穴住居跡は立山町吉峰遺跡、八尾町長山遺跡、朝日町柳田遺跡、福光町神明原A遺跡、上市町極楽寺遺跡などで検出されている。

ここでは、県内の前期から中期までの竪穴住居の特徴について概観してみたい。

2. 前期竪穴住居跡の様相（第31・32図）

前期中葉の様相 吉峰遺跡で10棟検出されている。方形は2棟で1号住居（3m四方）と2号住居（3.5m四方）がある。ともに柱穴、炉は確認されていない。主柱を立てない構造の竪穴住居跡になると考えられる。

円形は4棟で、すべてに張り出しのピット（貯蔵穴）を持つ。10号・12号・15号・61号住居である。10号住居（直径約3.5m）と12号住居（直径約4.5m）は柱配列が2重で特徴的である。壁際に1列、さらにその内側に1列の柱穴が巡る。報告書では外側の柱列が主柱で、内側の柱列は補助的な柱としている（立山町教委 1975）。10号住居は外側に7本、内側に6本ある。柱穴の大きさは内側と外側ともほぼ直径約20cmで、同規格である。12号住居は外側に10本、内側に6本ある。柱穴の大きさは外側20～40cm、内側は25～40cmである。主柱と補助柱の柱穴の大きさは変わらない。

15号住居は主柱5本で、直径約4mである。住居内の壁に沿って幅20～70cmのベット状遺構がある。61号住居は主柱が9本で、直径約7mである。柱穴は壁際から30～100cm離れて設置される。この住居は前期で最も大きい竪穴住居跡になる。

楕円形は2棟あり、13号・62号住居である。13号住居は主柱は11本で、壁際に沿って設置される。長軸4.5m、短軸4mを測る。これらの住居では、炉と貯蔵穴を結んだラインを主軸とすると、柱穴はほぼ対称に配置される。

住居内の施設は、炉、貯蔵穴、ベット状遺構がある。炉は地床炉で住居跡のほぼ中央に、貯蔵穴は住居の隅に作られる。貼床は認められていない。

前期後葉の様相 吉峰遺跡と長山遺跡から12棟検出されている。平面形態は中葉に存在した円形がなく、馬蹄形が出現する。

方形は吉峰遺跡33号住居の1棟のみである。主柱は9本で壁際に巡り、大きさは長辺5m、短辺3mである。住居の南側1mに貯蔵穴が作られる。

長円形は4棟ある。吉峰遺跡14号・17号・31号・32号住居で、すべてに張り出しピットが付属する。17号住居は主柱6本、長軸6m、短軸4mである。31号住居は主柱9本で壁際から10～70cm離れる位置に設置され、長軸4m、短軸6mになる。17号と31号住居は地床炉が2基作られる。

馬蹄形は3棟ある。36号住居では主柱7本、16号住居では主柱6本から構成される。

前者は長軸3m、短軸2.5m、後者は長軸4m、短軸3.5mを測る。ともに柱配列は不規則で住居跡の主軸で対称にはならない。

長山遺跡 1 号住居は馬蹄形で、長軸 4 m、短軸 3.65m を測る。主柱は 4 本で、炉は地床炉である。住居の北部分に張り出しがあり、住居跡に伴うものらしい。また、柱穴間を結ぶように溝が作られる。

前期竪穴住居の特徴 平面形態は方形・円形・長円形・馬蹄形があり、円形と長円形が主体である。時期的には前期中葉では円形が、前期後葉では長円形が、中期初頭では馬蹄形が主体となり、各時期の前時期には、その時期の主体となる平面形態が出現しており、連続性が指摘されている（立山町教委 1990）。

柱穴は円形を基調としたものが多く、掘形は直径 20～30cm が多く小型の柱穴で、数も多い。柱配列も不規則で、主軸を意識している場合と意識していない場合がある。また、柱を住居の平面形態に合わせて、巡らすように配置し、柱穴位置は壁際に接して、構築されることが多い。細い柱材を数多く使用し、上屋を構築するようである。

住居内の施設は、炉、貯蔵穴、ベット状遺構、溝がある。炉はすべて地床炉で 2 基地床炉を設置する住居もある。貼床は認められない。

貯蔵穴は円形・長円形・馬蹄形の住居にはほとんど付属しており、神保孝三が指摘するように（立山町教委 1975）、前期中葉では住居の隅に、前期後葉では住居の付近に設置される。

3. 中期竪穴住居の様相

中期前葉の様相（第 33・34 図） 吉峰遺跡、長山遺跡、砺波市厳照寺遺跡、庄川町松原遺跡、立山町白岩藪ノ上遺跡、朝日町馬場山遺跡群、同町不動堂遺跡などが挙げられる。平面形態は馬蹄形・方形・円形・長円形がみられる。馬蹄形は吉峰遺跡の 34 号住居で、主柱は 6 本、長軸、短軸ともに 6 m を測る。平面形態は長山遺跡の 1 号住居と類似している。しかし、長山遺跡の住居よりかなり大きい。地床炉と壁に沿って幅 20cm～1 m のベット状遺構がある。

方形は白石藪ノ上遺跡の 3 号住居がある。主柱は 4 本で、長軸 4.1m、短軸 3.5m を測る。地床炉とロート状ピットがある。柱穴は円形で直径約 20cm になる。

円形は長山遺跡や馬場山 H 遺跡、馬場山 G 遺跡で検出されている。長山遺跡の 3 号住居は主柱 4 本で構成される。炉は地床炉である。

長円形は長山遺跡・厳照寺遺跡・滝谷遺跡・白石藪ノ上遺跡・馬場山 D 遺跡・馬場山 F 遺跡・馬場山 G 遺跡・松原遺跡・不動堂遺跡で検出されている。主柱は 5～8、10～12、14 本である。長山遺跡 2 号住居は主柱 5 本で、長軸 4.7m、短軸 3.4m である。住居内に地床炉、ベット状遺構、溝を持つ。厳照寺遺跡 1 号住居は 6 本主柱で、長軸 4 m、短軸 3.1 m である。住居の主軸に土器埋設炉と楕円形のピットが存在する。貼床も検出されている。馬場山 D 遺跡 5 号住居は主柱 8 本で、長軸 8 m、短軸 4.5m である。地床炉 2 基、ベット状遺構、ロート状ピットを持つ。

松原遺跡 4 号住居は主柱 11 本で、長軸 11.2m、短軸 7 m である。住居の南部分に地床炉と貼床がある。柱穴の掘形は円形を基調として、直径 30～85cm を測り、ほとんどは 50cm 代である。前期の柱穴と比較すると大きくなる。

不動堂遺跡 2 号住居は主柱 14 本で、長軸 17m、短軸 8 m である。最も大きい住居跡である。炉は 4 基検出され、すべて石組炉である。埋甕が 2 基、周溝がある。

中期前葉の特徴 平面形態は長円形が主体となり、前期の竪穴住居よりも建物規模が大型化してくる。その代表的な住居は不動堂遺跡 2 号住居である。

柱穴の配置も壁際ではなく、壁ぎわからやや離れた位置に設定される。また、柱穴の形態や大きさも安定し、配列も建物の主軸を中心として、対称に配されるようになってくる。

このように、柱穴の規格性が強くなっており、前期から中期にかけて構築方法に変化があったのではないだろうか。

住居内の施設には、炉、ベット状遺構、溝、ロート状ピット、埋甕、貼床がある。炉は地床炉が多く、石組炉はまだ定着していないようである。

中期中葉の様相（第35・36図）朝日町境 A 遺跡、宇奈月町浦山寺蔵遺跡、大山町東黒牧上野遺跡、同花切遺跡、立山町野沢狐幅遺跡、富山市杉谷遺跡、同開ヶ丘中山Ⅲ遺跡、婦中町小滝谷遺跡、小杉町水上谷遺跡などが挙げられる。

平面形態は円形、長円形、隅丸方形がみられる。円形は東黒牧上野遺跡、杉谷遺跡で検出されている。東黒牧上野遺跡 5 号住居は直径 2 m で、中央に石組炉を持つ。小型の竪穴住居跡である。杉谷遺跡 1 号住居は、直径 3.5 m で、石組炉と埋甕がある。

長円形は東黒牧上野遺跡、野沢狐幅遺跡、水上谷遺跡で検出されている。野沢狐幅遺跡 125 号は主柱 4 本で、長軸 4.5 m、短軸 3.5 m である。柱穴は円形で直径は 15～30 cm と小型である。地床炉とロート状ピットが 2 基ある。

東黒牧上野遺跡 1 号住居は主柱 10 本で、長軸 8.4 m、短軸 6.4 m である。住居内には石組炉と柱穴の外側に幅 50 cm で高さ 10～20 cm のベット状遺構がある。その部分に 2 つで 1 組の長円形の石が置かれている。特殊な住居跡である。この住居が中葉では最も規模が大きい。

隅丸方形は開ヶ丘中山Ⅲ遺跡、浦山寺蔵遺跡、境 A 遺跡、東黒牧上野遺跡、花切遺跡、小滝谷遺跡、野沢狐幅遺跡で検出されている。開ヶ丘中山Ⅲ遺跡 1 号住居は主柱 4 本、2.6 m 四方である。石組炉を持つ。東黒牧上野遺跡 4 号住居は主柱 4 本、約 3.5 m 四方である。石組炉が 1 基あり、柱穴の間に溝が作られる。

中期中葉の特徴 平面形態は隅丸方形が主体となり、主柱は 4 本と 5 本が圧倒的に多くなる。5 本主柱はホームベース状に五角形に配置される。

また長円形の住居跡は前葉の形態を引き継ぐものとされており（富山県教委 1974）、長軸が 7～8 m を測る。それとは逆に直径 2 m の円形や 1 辺が約 2.5 m の方形の小型の竪穴住居跡の出現もこの時期の特徴と言える。

住居内の施設には、炉、ベット状遺構、溝、ロート状ピット、貼床がある。炉はほとんどが石組炉でこの時期にはかなり定着する。

中期後葉の様相（第37図）中期後葉では、朝日町下山新遺跡、富山市北代遺跡、浦山寺蔵遺跡、大沢野町直坂遺跡、同布尻遺跡、城端町西原 A 遺跡などが挙げられる。平面形態は馬蹄形と方形がみられる。

馬蹄形は北代遺跡、西原 A 遺跡、直坂遺跡でみられ、北代遺跡 1 号住居は主柱 4 本、長軸 4.9 m、短軸 4.3 m であり、石組炉とベット状の遺構がある。西原 A 遺跡は主柱 7 本、長軸 4.6 m、短軸 4.6 m である。北代遺跡と同様石組炉とベット状遺構がある。直坂遺跡 2 号・3 号・5 号住居は主柱が 5 本と 8 本である。4 号住居が最大で長軸 7 m、短軸 6.5 m になる。炉、ベット状遺構、溝、埋甕が作られ、炉は石組炉で一部は複式炉である。

方形は直坂遺跡、下山新遺跡がある。直坂遺跡 1 号・3 号住居で 4 本主柱、石組炉、埋

甕、溝が作られる。

中期後葉の特徴 馬蹄形と方形がみられが、円形がなくなる。住居内の施設には、炉・ベット状遺構・溝・埋甕・貼床があり、炉の一部は複式炉になる。

4. まとめ

このように、前期中葉から中期後葉にかけての平面形態を中心に竪穴住居跡の様相を概観してきた。各時期により特徴があることがわかる。前期中葉では円形、前期後葉から中期前葉にかけては長円形、中期中葉では隅丸方形、中期後葉では方形か馬蹄形になる。

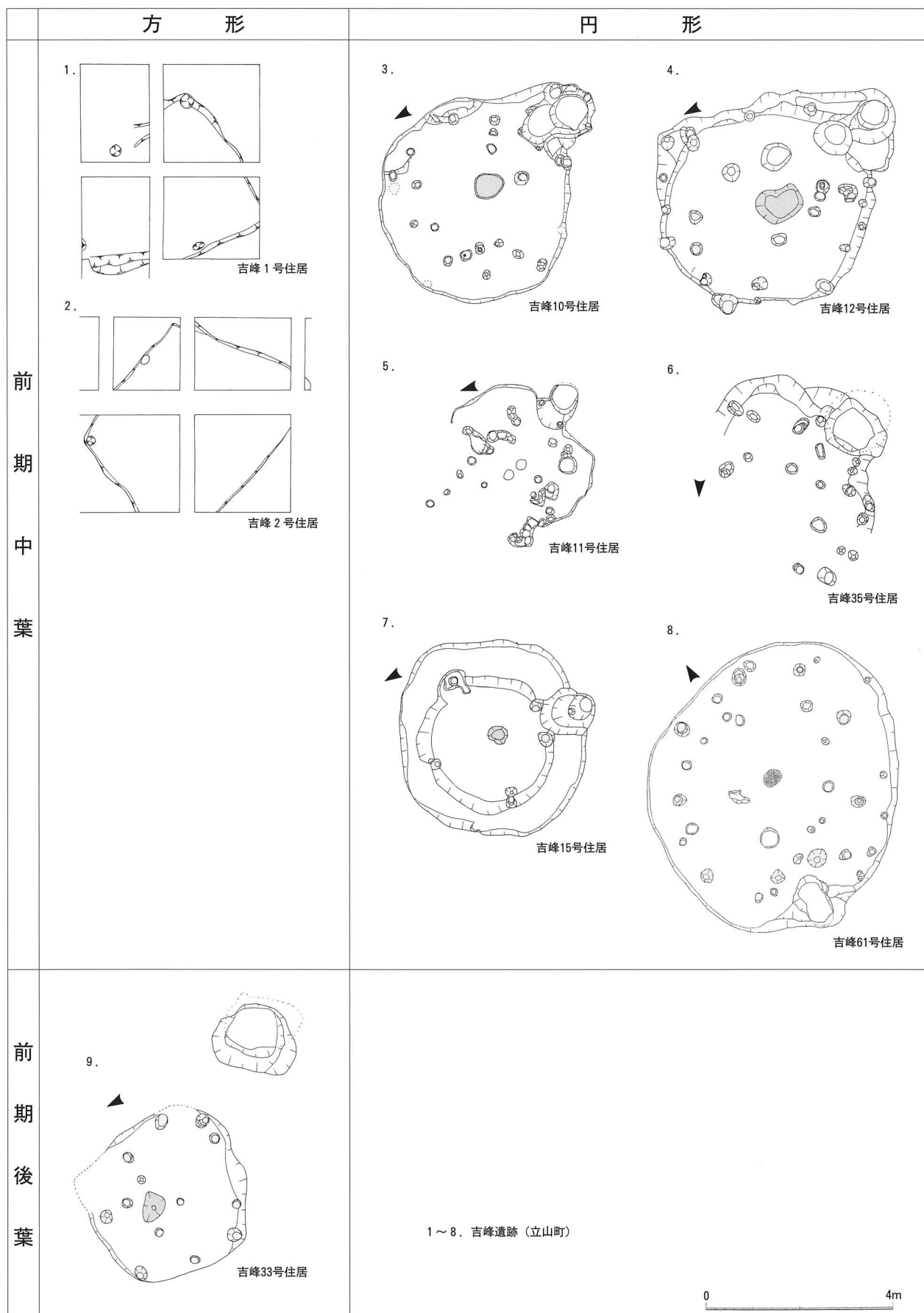
北押川C遺跡から検出されたS I 0 1は、平面形態が長円形で主柱の本数が多く壁ぎわに巡って設置され、県内の前期後葉の竪穴住居の平面形態に類似する。

また、S I 0 1には土坑と張り出しが付属する。土坑は貯蔵穴とすると、柱穴に囲まれた内に設置されており、前期後葉の設置位置とは様相が違う。張り出しは前期中葉から後葉の円形と長円形の竪穴住居跡には付属するが、その場合はピットが伴うことが多い。S I 0 1ではピットは伴わない。

平面形態は前期竪穴住居の特徴を持つが、土坑や張り出しの状況に違いがみられ、前期竪穴住居に新たなタイプが存在することがわかった。

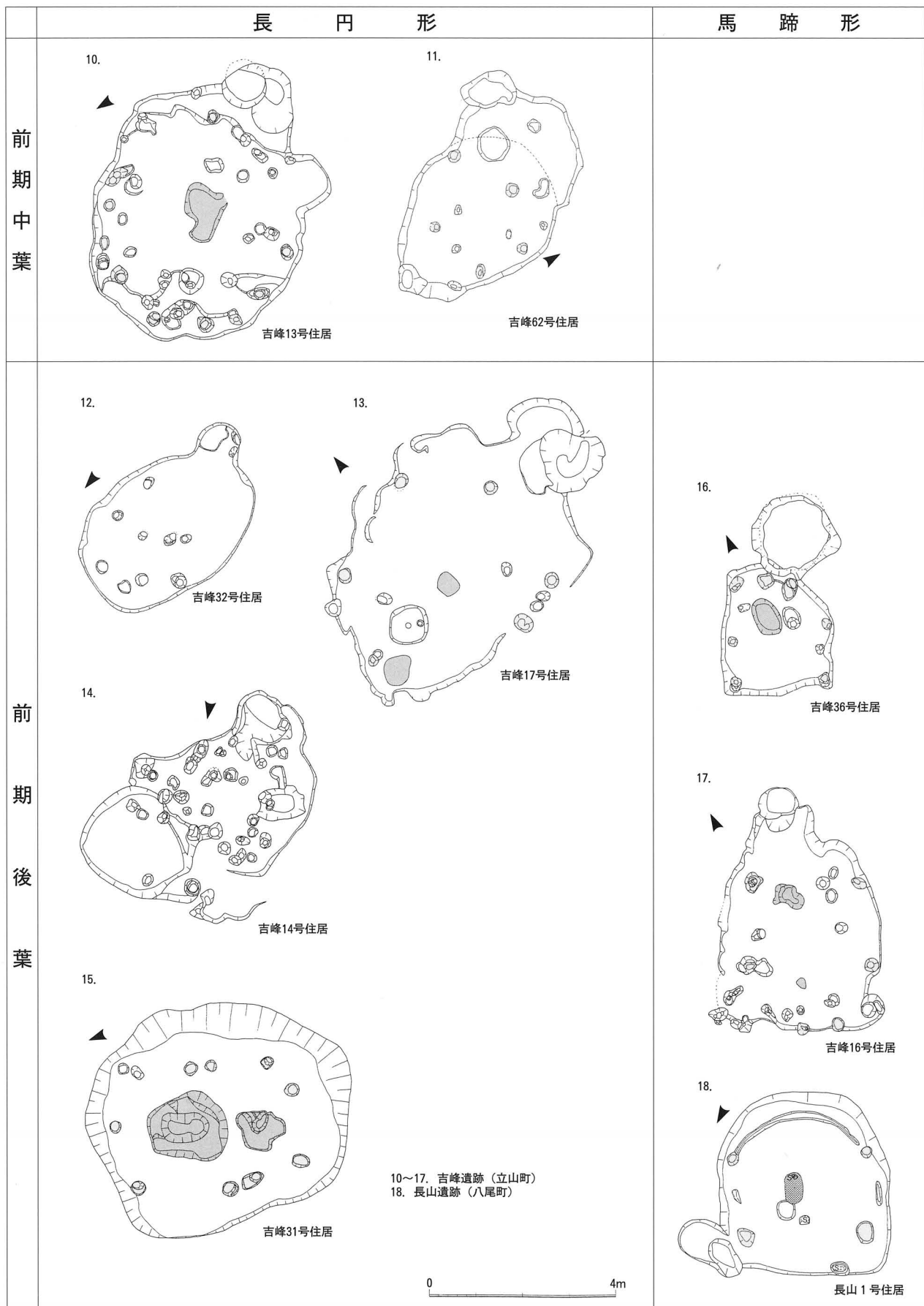
参考文献

- 大山町教育委員会『富山県大山町花切遺跡発掘調査概要』1988
大山町教育委員会『富山県大山町東黒牧上野遺跡A地区発掘調査概要』1990
大山町教育委員会『東黒牧上野遺跡A地区』1995
庄川町教育委員会『富山県庄川町松原遺跡緊急発掘調査概報』1975
立山町教育委員会『富山県立山町埋蔵文化財緊急発掘調査概報 白石藪ノ上遺跡 吉峰遺跡』1981
立山町教育委員会『野沢狐幅遺跡発掘調査概報』1985
立山町教育委員会『吉峰遺跡- 第7次発掘調査報告書-』1990
富山県教育委員会『富山県朝日町下山新遺跡第1次発掘調査概報』1973
富山県教育委員会『富山県大沢野町直坂遺跡発掘調査概報』1973
富山県教育委員会『富山県小杉町水上谷遺跡緊急発掘調査概報』1974
富山県教育委員会『富山県朝日町不動堂遺跡第1次発掘調査概報』1974
富山県教育委員会『富山県立山町吉峰遺跡-第4次緊急発掘調査概報』1975
富山県教育委員会『富山県砺波市巖照寺遺跡緊急発掘調査概報』1977
富山県教育委員会『富山県宇奈月町浦山寺蔵遺跡緊急発掘調査概報』1977
富山県教育委員会『北陸自動車道遺跡調査報告一朝日町編 3 一馬場山D遺跡 馬場山G遺跡 馬場山H遺跡』1987
富山市教育委員会『富山市杉谷遺跡発掘調査報告書』1976
富山市教育委員会『北代遺跡』1981
富山市教育委員会『富山市開ヶ丘中山Ⅲ遺跡・開ヶ丘中山Ⅳ・開ヶ丘中山Ⅴ遺跡・開ヶ丘狐谷遺跡発掘調査報告書』2002
橋本正「竪穴住居の分類と系譜」『考古学研究 第23巻 第3号』1976
八尾町教育委員会『富山県八尾町長山遺跡・京ヶ峰古窯跡緊急発掘調査概要』1985
八尾町教育委員会『富山県八尾町長山遺跡発掘調査概要(2)』1986
八尾町教育委員会『富山県八尾町長山遺跡発掘調査概要(3)』1987



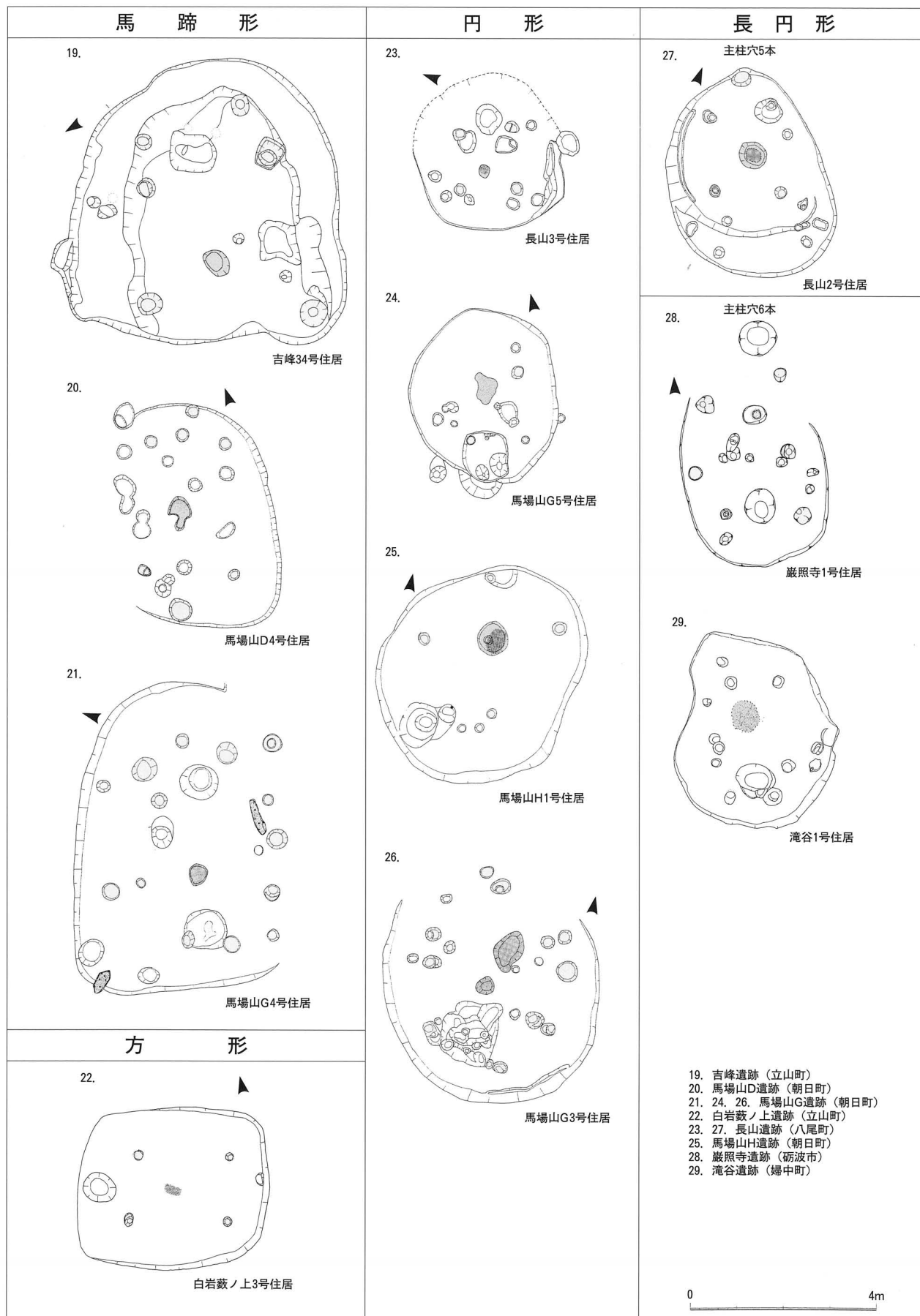
第31図 県内縄文時代竪穴住居（前期中葉～後葉） S = 1 : 120

主柱穴 地床炉



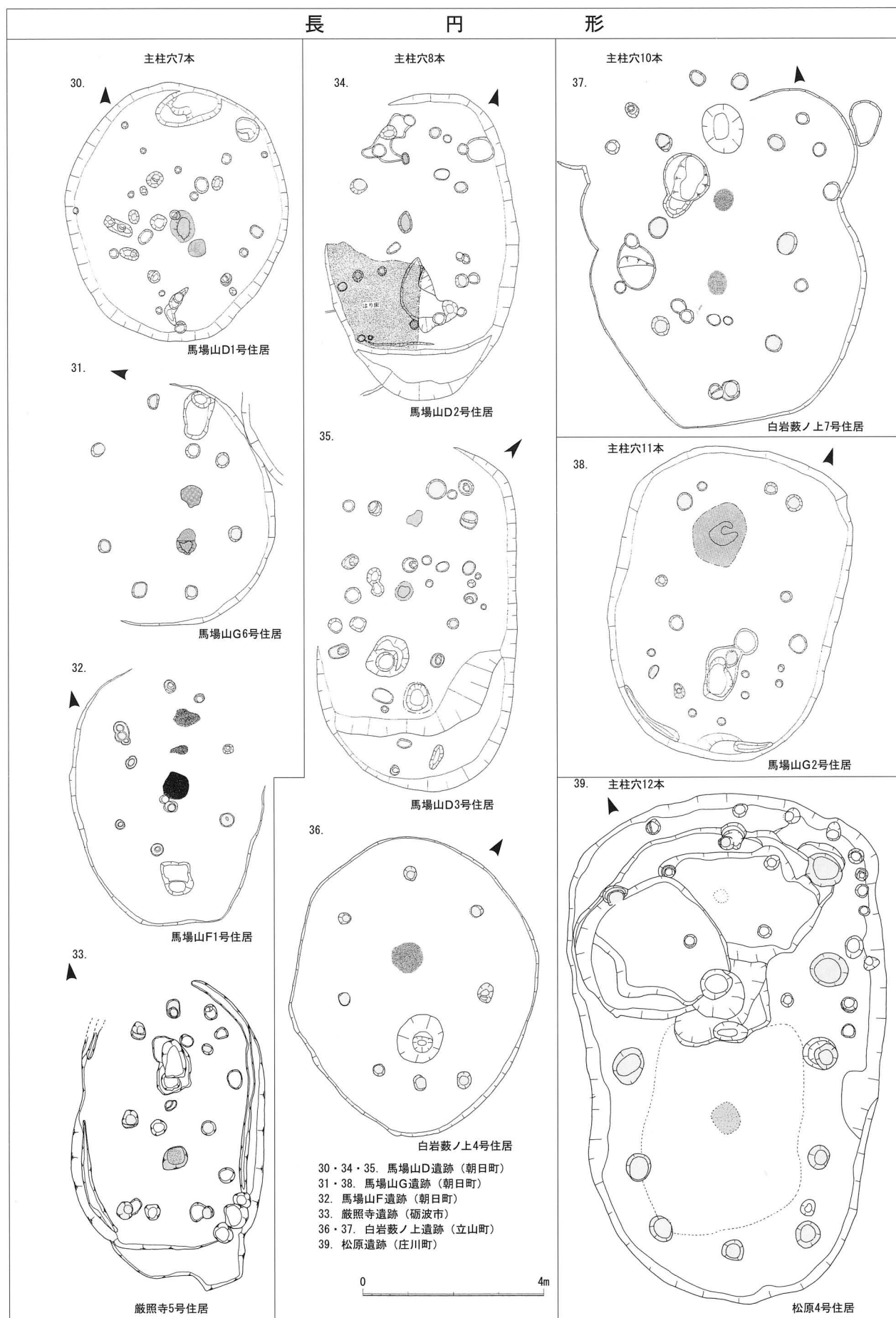
第32図 県内縄文時代竪穴住居（前期中葉～後葉） S = 1 : 120

支柱穴 地床炉



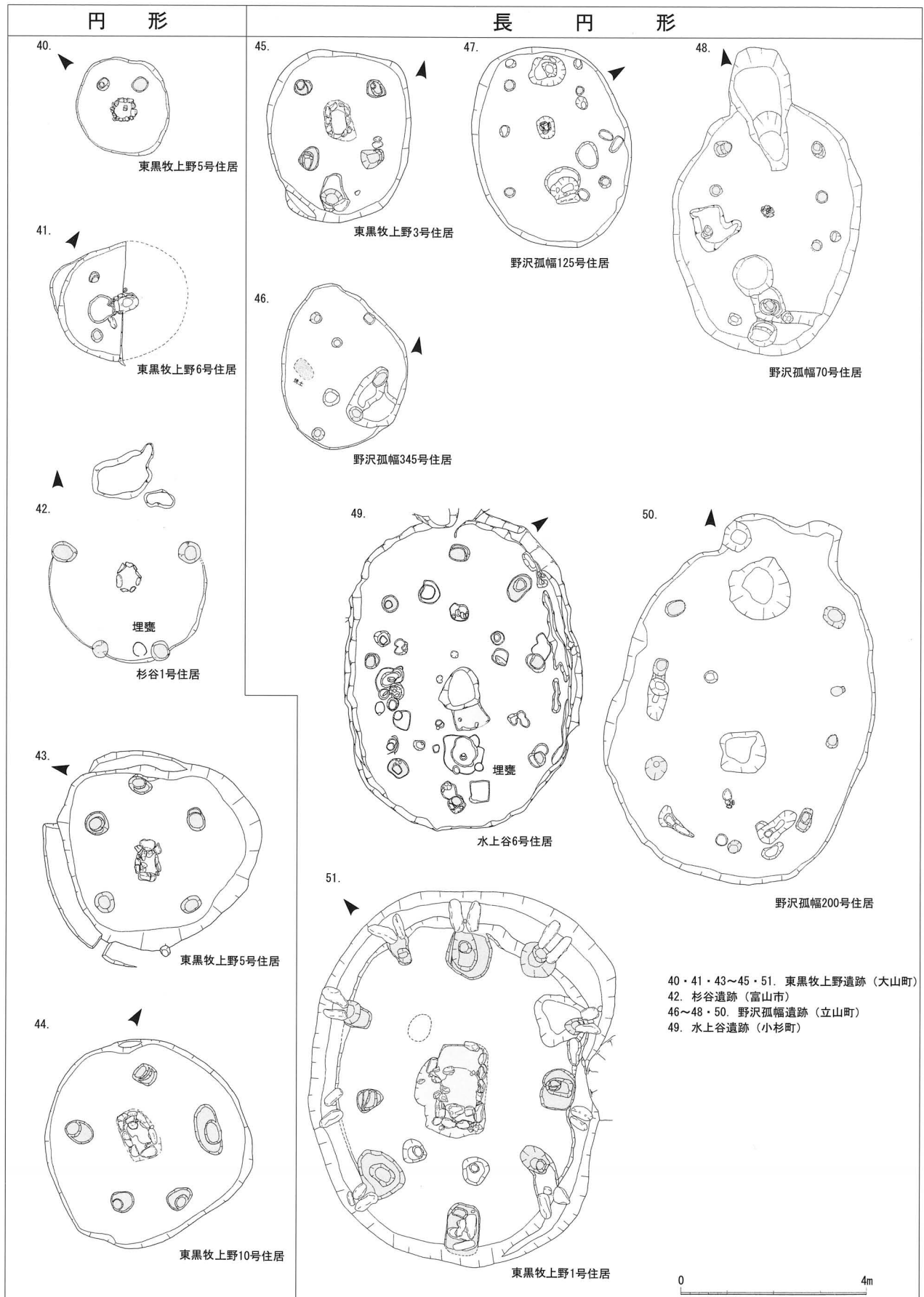
第33図 県内縄文時代竪穴住居 (中期前葉) S = 1 : 120

■ 主柱穴 ■ 地床炉

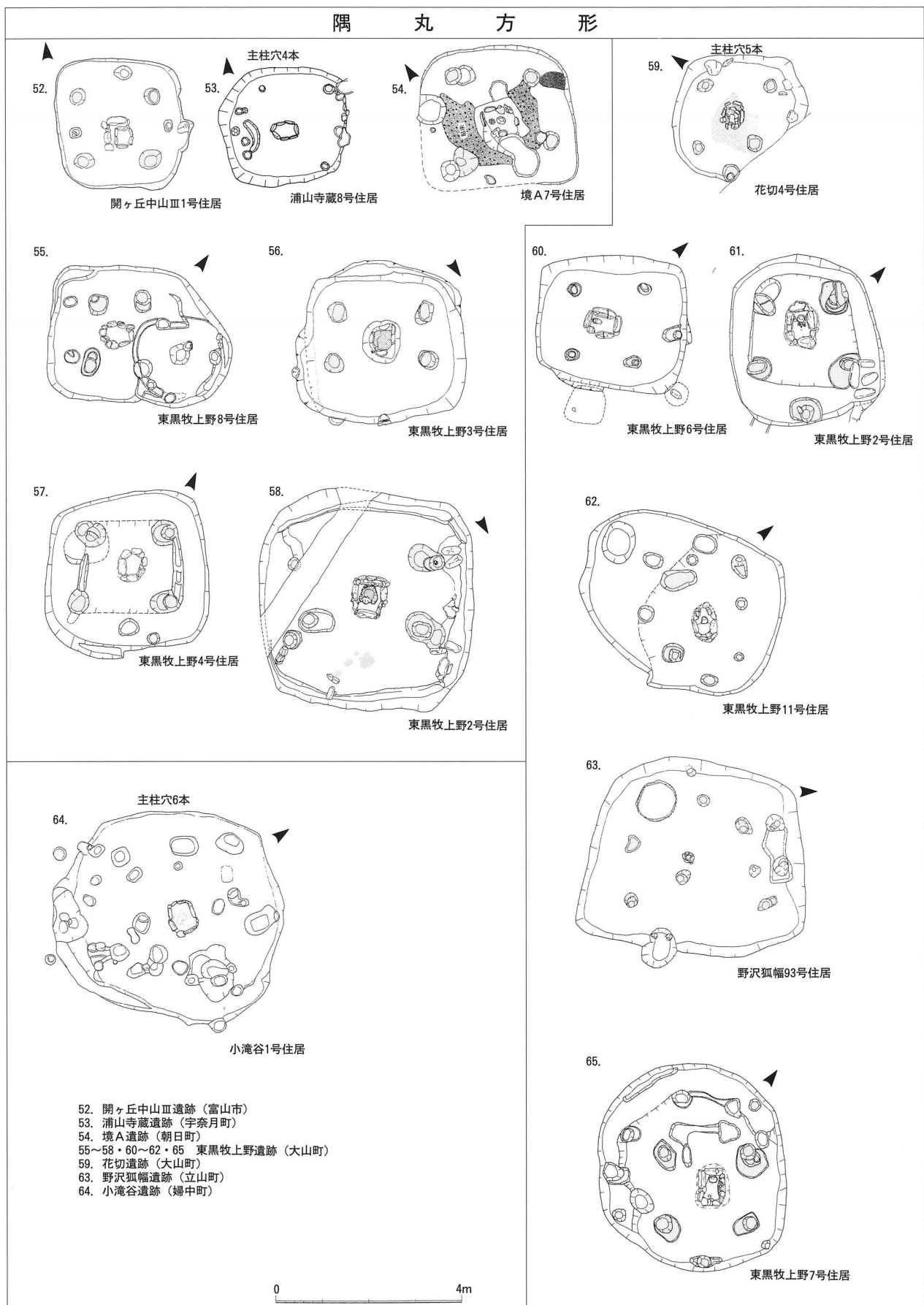


第34図 県内縄文時代竪穴住居（中期前葉） S = 1 : 120

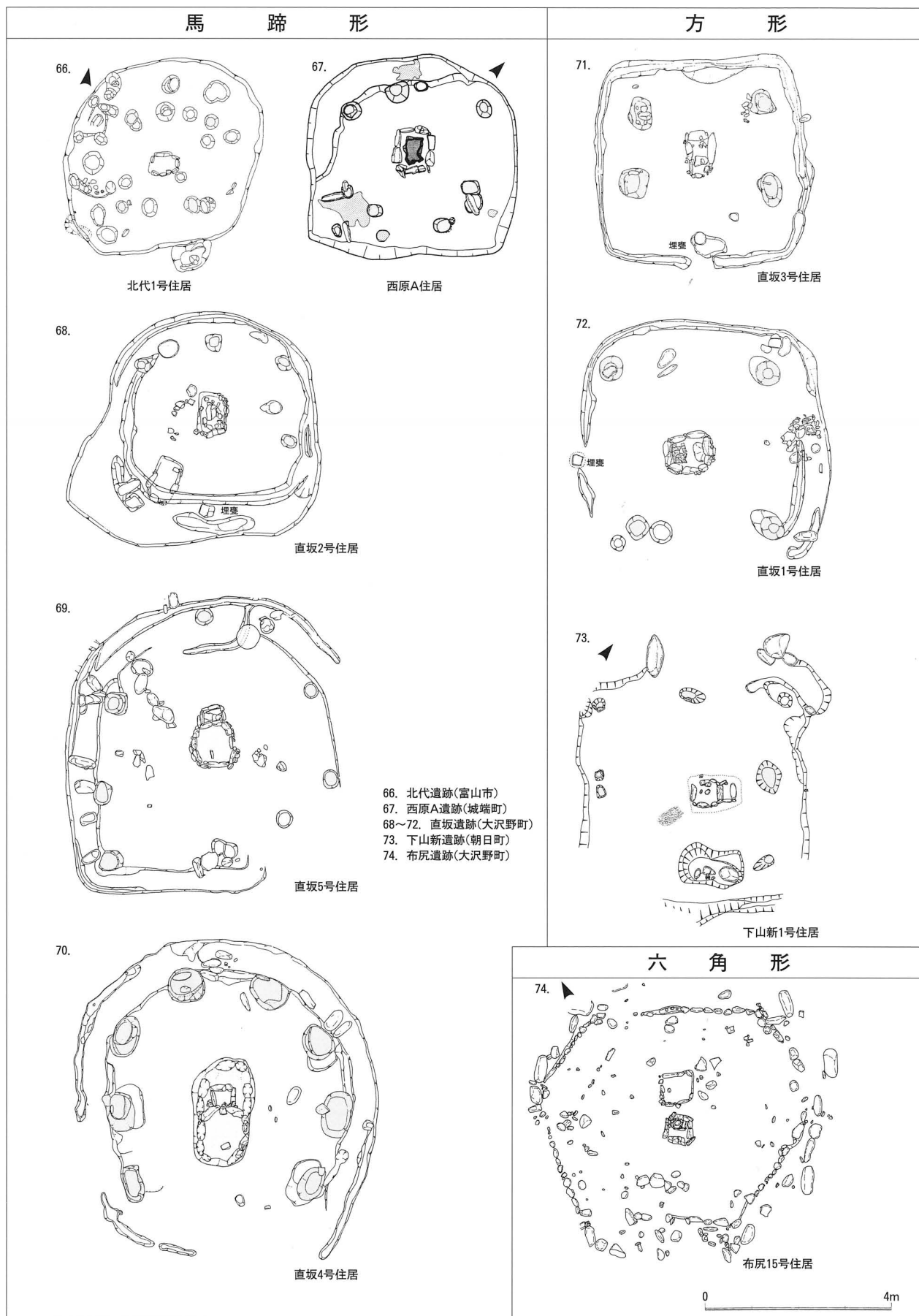
主柱穴 地床炉



第35図 県内縄文時代竪穴住居（中期中葉） S = 1 : 120 主柱穴 石組炉・地床炉



第36図 県内縄文時代竪穴住居 (中期中葉) S = 1 : 120



第37図 県内縄文時代竪穴住居（中期後葉） S = 1 : 120

■ 主柱穴 □ 石組炉